

【北海道小学校理科研究会 全道研究テーマ】
一人一人の問題解決を実現する

I. 研究テーマ設定の背景

■変わらないもの

今年度、70周年を迎えた本会は、発足時から、子どもの分かり方を捉え、子どもが生き生きと学ぶ子どもの主体の問題解決の実現に向けて、研究を積み重ねてきました。

昨年度は、全道研究テーマ『子ども主体の問題解決』を問い直すの下、各支部がそれぞれの強みや特徴を活かした研究を進めました。

第69回全道大会旭川大会では、「問題を見いだす」、「科学的に解決する」、「知を更新する」子どもの姿に着目しました。そして、子どもの分かり方、教師の関わり、何より、子どもが主体的に問題解決する姿とはどのようなものなのか、これからの時代に求められる理科学習とはどのようなものなのかを追究しました。また、札幌支部、函館支部、釧路支部、オホーツク支部のそれぞれ独自の視点をもって研究を進め、子ども主体の問題解決について議論を深めることができました。

旭川大会で公開された授業では、事象への関わりを求める子どもの姿が見られました。そして、友達との対話とICTの活用から、実験方法を発想して追究を進めていました。正に、現代の技術を用いながら資質・能力を発揮し、主体的に問題解決している姿と言えます。これこそ、「どのような状況になっても、協働的によりよいものを目指して方法を発想し、問題を解決する人」を育むために目指す子どもの姿です。子どもを取り巻く状況や技術が変化しても、最も大切に本質的なものは、私たちが発足時から目指している『子ども主体の問題解決』であると改めて感じました。

■「一人一人の問題解決」と 題することの意義

目の前の子どもたちの資質・能力を育むために、主体的に事象に関わり、問題を見だし、他者と共

に協働的に問題を解決する姿を求めてきました。それは、決して1時間の授業が上手く進むことではなく、どの子どもも、充実した問題解決をするということの意味していました。

しかし、自分自身の実践を振り返ってみると、常にそうした子どもの姿を実現できていたわけではありません。炎が燃え続ける時間と覆いの大きさの関係に問題を見いだす授業を行った時のことです。消えていくろうそくの炎をじっと見つめ、事象に浸りながら見いだした問題について、容器の大きさを工夫したり、容器の中の気体の成分を調べたりしながら夢中になって追究を進める子どもがいました。一方で、自分の考えを表現したり、実験方法を発想したりできないままに、活動が進んでいく子どもがいました。工夫を凝らして問題を解決していく子どもの傍らに、事象に浸ることができずに、自分の問題解決を実現することができていなかった子どもがいたのです。

また、新たな時代の到来を感じさせるキーワードや教育用語として、ウェルビーイング、STEAM教育、ICTの活用などがあり、子どもの問題解決を充実させる研究を進める上での重要な切り口や手だてとなります。一方で、これらが目的化してしまい、本来私たちが見なくてはならないものを見失ってしまうこともあります。

私たちが最も見なくてはいけないものは、やはり一人一人の子どもです。

子どもが事象に出会い、事象と関わる中で自分の中の自然認識との違いから問題を見いだします。そして、根拠をもった予想や仮説を発想し、それに基づいて発想した解決の方法で再び事象に関わり、妥当な考えをつくり出すことで問題を解決していきます。これは、これまでに目指してきた、これまでに望んできた子どもの姿です。しかし、どの子どもからも、このような姿を引き出すことは、簡単なことではありません。言うまでもないことですが、子ども一人一人が着目する事象も、問題を見いだすタイミングも、考えの傾向にも、経験にも、違いがあるためです。この個性豊かな子どもたち一人一人の問題解決を実現するためには、一人一人を見取り、その違いを受け止めたり、

活かしたりするような授業の幅が必要なのではないでしょうか。そう考えると、これまでにより授業とされてきたものとは違った展開が生まれるかもしれません。例えば「あれ？」をきっかけとしない問題。予想や仮説をチームで検討する活動。解決が同じではない展開。

もちろん、これまでの研究の積み上げによって解明されてきた問題解決の在り方、手だて、子ども観、授業観を基にすることは前提とします。その上で、一人一人の問題解決が実現できているかどうかに関心を当てることで、研究を更に一步推し進めることにつながるのではないかと考えます。

5年後には、全国大会を控えています。私たちの理科観、子ども観、授業観を全国へと発信し、これからの理科教育を形づくるためには、北海道の理科を牽引し、私たち自身がその見識を広げていくことが求められます。新たな世の中を創る子どもを育む理科学習について授業や具体的な子どもの姿を基に共有していきましょう。

II. 研究推進

全道研究テーマ設定

全道テーマ『子ども主体の問題解決』を問い直す」の下、2年間に渡って研究を深めました。全道組織であることのよさを活かし、各支部がそれぞれの視点で研究を深化させることによって、新たな時代における授業像・子ども像に迫りました。

「一人一人の問題解決を実現する」の具現化への道は様々あるはずですが、今年度も全道テーマの下、各支部がそれぞれの強みを生かした独自の視点で研究を進めていくこととします。本会が5つの支部からなる全道組織であることのよさを生かし、テーマ実現に向けて、各支部で研究主題を設定し、目指すべき授業像や子ども論を明らかにしていきます。



各支部の主題設定

全道研究テーマ「一人一人の問題解決を実現する」に迫る際の研究の切り口について考えてみましょう。

「一人一人の子どもが問題解決を実現する」ために、「何をするのか」に各支部の特徴が表れてくるものと考えています。それは、支部ごとに積み上げてきた研究を背景にそれぞれが独自の切り口でテーマに迫ることになるからです。

- 「事象に浸り、関わり合いながら追究する子ども」（どの子どもも事象に浸る手立て。活動を通して問題を見いだすための他者との関わり方の在り方。これらを明らかにする。）
- 「協働的な学びの中での、一人一人の子ども追究の変化」（協働的な学びの中で、一人一人がどのように活動し、どのように学びを深めているのかを見取る。）
- 「一人一人の子どもの分り方」（子ども一人一人の分り方を見取り、違いを活かす学びの在り方について検討する。）

このように、研究を進める上での切り口は、いくつも見つかるでしょう。各支部が独自に設定する研究主題を通してテーマに迫る道は一つではありません。多様であるからこそ、最も大切で本質的なことが、また一つ見えてくるのではないかと考えます。

『子ども主体の問題解決』を基点に、

一人一人の問題解決に目を向けた研究に

今年度の研究を通して、未来を見据えた一步を踏み出していきたいと思います。これまでと違うことをしなければならぬわけではありません。これまでに積み上げてきた研究を基点として、本質的で不易なもの厚みを増していく。そのような変化を求めて研究を進めていきましょう。



【北海道小学校理科研究会 研究部】